

大 学 史 研 究 通 信

第 109 号 2024 年 3 月 19 日 (火)

大学史研究会

第 109 号の内容：会員情報・新入会員 自己紹介、2023 年度第 46 回大学史研究セミナー報告、2023 年度第 46 回大学史研究セミナー参加記、『大学史研究』編集委員会からのお知らせ、2023 年度総会報告について、2023 年度会計報告について、運営委員会からのお知らせ、会員新刊ニュース、退会者の報告、編集後記、大学史研究会運営委員・事務局員一覧

会員情報

新入会員 (順不同)

小林 尚矢 会員

高野 竜太 会員

(所属：東京大学事務職員)

新入会員 自己紹介

小林 尚矢 会員

昨年 10 月に入会いたしました小林尚矢と申します。愛知県生まれ、佐賀県育ちです。現代日本の教育問題を意識しつつ、特に米国大学史における〈書くこと〉の系譜に関心を持っています。昨年度末に提出した修士論文では、19 世紀のハーバードを舞台にした事例研究に取り組みましたが、まだまだ道半ばだと実感しているところです。ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

高野 竜太 会員

この度入会いたしました高野竜太と申します。現在は東京大学に事務職員として勤めております。2017 年に千葉大学大学院修士課程を修了し、修士ではデイヴィッド・ヒュームの政治思想を研究しておりました。職務をとおして学生運動史について関心を持ち、現在は東大紛争期における「学生の権利」の確立過程を中心的に研究しています。諸先輩方におかれましては、ご指導ご鞭撻の程宜しくお願いいたします。

(会員情報担当：船勢肇)

2023 年度第 46 回大学史研究セミナー報告

2023 年 12 月 2 日 (土)、3 日 (日) に第 46 回大学史研究セミナーが、4 月にオープンしたばかりの中央大学茗荷谷キャンパスにて、4 年ぶりに対面で開催されました。

初日の午前中には、エクスカージョンとして、午後のシンポジウムで扱う神田地区の学生街を、シンポジストの一人である岩立将史氏のご案内で歩きました。神保町駅をスタートして、スズラン通り (古書店街)、学士会館 (南校所在地)、英吉利法律学校発祥地 (現神田スクエアホール付近)、東京物理学校校舎跡地 (旧東京法学校・仏学校校舎)、旧中央大学駿河台校舎跡地、明治大学、中央大学駿河台キャンパス、ニコライ堂を経て、御茶ノ水駅まで、約 1 時間半のコースでした。

午後は「神田「学生街」と大学史」というテーマで、神田地域にゆかりのある大学教職員で構成する法律学校研究会のメンバーにご登壇いただき、シンポジウムを開催しました。

2000年代以降、学生募集などの観点から大学キャンパスの「都心回帰」は増加傾向にあります。キャンパスの移転は、必然的に学生・教職員などの「人」の移動を伴いますが、この「人」の移動は、交通インフラの整備、生活するための空間の形成など、大学周辺地域に変化をもたらし、所謂「学生街」が形成されてきました。しかし近年、コロナ禍を境に、学修空間のデジタル化が大きく進展し、大学周辺の飲食店などが相次いで閉店するなど、「学生街」の在り様にも変化が生じて来ました。キャンパス移転や大学の在り方に大きく影響される「学生街」は、今新たなステージを迎えようとしていると考えられるのではないだろうかという問題意識のもと、瀬戸口龍一氏（専修大学大学史資料室）「法律学校研究会」の活動と専修大学の試み」、松原太郎氏（日本大学企画広報部広報課）「神田学生街と私立法律学校」、岩立将史氏（中央大学広報室大学史資料課）「中央大学のあゆみと神田学生街に関する所蔵資料の紹介」の3件のご報告を頂いた後、「学生街」の構成要素とは一体何なのかについて、全体討議を行いました。

2日目の自由研究発表は、当初7件の予定でしたが、体調不良による当日欠席があり、松浦正博会員（広島女学院大学名誉教授）「中世パリ大学におけるナチオ(natio)の役割と機能」、小林尚矢会員（科学技術振興機構）「エドワード・T・チャニングの修辞学構想—ハーバード学則改革(1825)との関連を視点として—」、福石賢一会員（高知工科大学）「戦間期ケンブリッジ大学工学コースの教育理念：Inglisの言説を中心に」、今野翔太会員（東京大学大学院）「日記史料にみる“帝大教授”」、羽田貴史会員（広島大学・東北大学名誉教授）「当面する大学教育の課題に対応するための方策について」の成立過程—「学生参加」を中心に—、以上5件の報告となりました。参加者からの多くの質問があり、活発な討議が行われました。

ご報告をいただいた皆様、参加者の皆様、そして何よりも会場校をお引き受けくださいました岡田大士会員に、この場をお借りして御礼申し上げます。初日のシンポジウム後には中央大学茗荷谷キャンパスの学生食堂にて懇親会も開催することができましたが、ひとえに岡田会員のご尽力のおかげです。

次回セミナーについては、決まり次第、通信および本会HPにてお知らせいたします。今秋、再び皆様にお会いできることを楽しみにしております。

(セミナー担当：山本珠美)

2023年度第46回大学史研究セミナー参加記

小林 尚矢 会員

セミナー参加に先立ち、「学生街」に関する事前勉強会にも出席いたしました。残念ながら、セミナー1日目の特別企画への参加は叶いませんでしたが、シンポジウムでは、さらに踏み込んだ内容のご発表と討論を拝聴できました。事前勉強会とシンポジウムに共通し、「学生街とは何か」が主たる論点だったように思います。大学史研究の中でこの主題がいかに拡張・深化されていくのか、今後の展開に注目したいです。

2日目は、時代も場所も多様なご研究を拝聴しました。事前に概説書を読み返して「予習」したつもりでしたが、先生方のご研究を前に、概説書では味わい難い歴史研究の面白さと難しさを再発見した次第です。

また、私自身も研究発表する機会を頂戴しました。拙い発表ながら、諸先生方から重要なお指摘を賜り、大変勉強になりました。発表後にも、多くの会員の皆様から示唆に富むコメントをお寄せいただきました。今後の励みとなる機会を頂戴したことに、重ねて深謝申し上げます。

ふり返ってみると、私がセミナーに初参加したのは、コロナ禍の最中にオンラインで開催された2020年のことでした。修士課程の1年生だった当時、先の見えない孤独な日々の中で、自分が大学にいることの意味が分からなくなったこともありました。あれから約3年の月日が経ち、対面で皆様と交流できる時世になったことを感慨深く思います。私にとって、

今回のセミナーは、本研究会のHPにもある「会員間の忌憚のない学問的な対話と平等な人間的つながり」を肌で感じるひとときでした。

末筆ながら、格別のご配慮を賜りました会場校の中央大学様、ならびに運営に携われた先生方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

(事務局・通信担当：蝶慎一)

『大学史研究』編集委員会からのお知らせ

『大学史研究』第33号(12月刊行予定)への投稿を募集しています。「投稿申し込み」の締め切りは2024年3月31日です。投稿するにはまず「申し込み」をした上で、原稿の提出は6月30日締め切りとなります。会員皆様からの積極的な投稿をお待ちしております。

【投稿申し込み方法】

投稿ご希望の方は、2024年3月31日までに大学史研究会ホームページの「紀要 大学史研究」サイト掲載の「投稿申込フォーム」で諸事項を入力し、サイトから「送信」して下さい。投稿カテゴリーは、論文、研究ノート、史料紹介、書評もしくは図書紹介です。カテゴリーの希望があれば申込時に申請可能です。ただし最終的な掲載カテゴリーは、審査の上で編集委員会が判断します。申込み詳細は、大学史研究会ホームページまたは『大学史研究』巻末の「投稿規定」をご確認ください。

【ご留意】

投稿には、大学史研究会の会員であり、入会以来の年会費をすべて納入している必要があります。

【原稿提出】

投稿方法の詳細は「投稿申し込み」後に編集委員会からメールでお知らせします。投稿原稿は2024年6月30日までに提出してください。なお、投稿申し込みをしたものの、諸事情により原稿提出ができなくなった場合(提出辞退)は、投稿用メールアドレスにて編集委員会までご連絡ください。

(紀要編集委員長：大川一毅)

2023年度総会報告について

セミナー当日の2023年12月2日(土)に、以下の通り対面形式によって総会を開催しましたので報告します。

《報告事項》

1. 運営委員会・事務局活動報告

- ・第45回大学史研究セミナー：オンラインにて2022年12月3日(土)4日(日)開催。参加者延べ86名。
- ・大学史勉強会 2023年10月28日(土)に開催(中央大学茗荷谷キャンパス)、15名参加。
- ・運営委員会兼事務局会議：2回(5月(対面)、9月(オンライン))開催。
- ・運営委員 推薦委員会：2023年11月(オンライン)開催。
- ・大学史研究通信：4回発行(106号、107号、108号、セミナー号外)。

2. 会員数報告

- ・会員数：134名(機関会員7を含む)。
- ・昨年以降の増減：入会者7名、退会者5名。
(会計年度との違いがあるため、会計報告の会員数とは異なる場合がある)

3. 会員情報の収集について

2023年12月10日（日）を以て、会員情報収集の作業を終えることとする。以後の会員情報の変更については、通常通り、変更届を事務局宛に送っていただくこととなった。

なお、会員情報未回答者については、研究会保有の情報で更新作業を進める。ただし、その情報に誤りがあり、メール等の連絡が届かない、会費納入に関する郵便物が届かないという事態が生じる可能性がある。しかしながら研究会としては、これまで十分に通信等においてアナウンスを行ってきたため、研究会からの連絡等の未着に関しては、会員個人の責任とすることも認められた。

4. 大学史研究通信のメールでの送付への切り替えについて

これまで通信のメール配信等への切り替えをお願いしてきた。会員情報の収集も作業を終えるため、次号の通信からはメール配信及びHPでの掲載に切り替えを行う。これにより通信発送費用の削減が可能になること、必要に応じてタイムリーに研究会からの情報を会員にお届けすることが期待される。なお、郵送を希望する会員については、会員情報収集の際に申し出ているので、引き続き郵送を行う。通信刊行方法の切り替えについてはHP及び会員へのメールで周知を行う。

5. 日本学術会議協力学術研究団体への加盟について

会員情報の収集が完了することを踏まえ、今年度末に、一度申請書を提出する予定である。

6. 『大学史研究』のJ-STAGEへの掲載について

これまでの紀要に掲載された論文等をJ-STAGEへ掲載することの可否を会員ご自身にご判断いただく期間を設けてきた。回答期間内に数件問い合わせがあり、個別に対応を行っている。原則として、全ての原稿をJ-STAGEで公開することとする。

お亡くなりになった方、元会員の方でご連絡が必要な方については、事務局から個別にご連絡をする。万一、ご連絡がつかない方についてはJ-STAGEでの掲載を見送ることとする。

（追記）2024年3月1日現在、J-STAGEで公開を進めている。PDF化の進捗に合わせて、順次公開してゆく。

7. 次期運営委員 推薦委員会の報告

2023年11月6日（月）にZOOMを使用して、推薦委員会を開催した。推薦委員は坂本辰朗、大川一毅、山崎慎一（以上、運営委員兼推薦委員、敬称略）、香川せつ子、沖塩有希子、戸村理、間篠剛留（以上、会員、敬称略）である。推薦委員会の結果としては、改選対象の坂本辰朗、山本珠美、山崎慎一、船勢肇、山本尚史（敬称略）の5名の運営委員について、業務の過渡期になることから、事業の継続性を重視して、全員を再任することで意見のまとまりを得た。ただし、任期は1年とする。

次年度において、全員（大川一毅、吉野剛弘（敬称略）を含む7名）を改選対象として、次期推薦委員会の立ち上げを、2023年総会において審議することが求められた。今回の推薦委員会において、次期（2025年以降）委員として複数名の会員を候補者として挙げていただいた。どなたからも前向きなお返事をいただいている。次回の推薦委員会での候補者選定に関係するため、今回はお名前の公表は差し控える。

《審議事項》

1. 次期運営委員 候補者について

次期運営委員の候補者として、坂本辰朗、船勢肇、山崎慎一、山本珠美、山本尚史（敬称略）の5名が推薦され、承認された。任期は2024年のセミナー迄とする。

2. 2024年度に迎える紀要編集委員長、副委員長の運営委員任期の満了について

審議事項(1)と関連するが、紀要『大学史研究』第33号の刊行を以て、紀要編集委員長大川一毅委員、同副委員長の吉野剛弘委員が2年の任期を迎える。紀要『大学史研究』の編集委員長・副編集委員長は運営委員として参画することとなっている。ただし紀要の編集体制については、紀要刊行体制への影響も大きいことから、次期紀要編集委員長・副委員長の候補者について、大川委員・吉野委員からの推薦を基にして、選出を進めることが承認された。

3. 運営委員 推薦委員会の立ち上げについて

次年度、運営委員7名全員が改選対象となるため、次期運営委員の推薦委員会を立ち上げることが、総会において承認された。本件については、通信(本号)において会員に周知を行う。

4. 長期未納会員の会員資格喪失について

大学史研究会 会則(2019年11月23日制定 通信第99号(2020.1.30)掲載)

第2章 会員

第4条 本会の目的に賛同し、大学史研究に関心を有する者をもって会員とする。会員を通常会員および学生会員とする。

(1) 通常会員の会費は、年額金5,000円とする。

(2) 学生会員の会費は、年額金3,000円とする。

第8条 前条の規定にかかわらず、次の場合には本会の会員としての参加を制限し、または会員としての資格を失う。

(1) 会費納入を怠った者は、研究会での発表、紀要への投稿など会員の権利を制限される。

(2) 3年以上会費の納入を怠った者は、会員の資格を失う。

(3) その他、会の目的達成に支障をきたしたり、会の名誉を傷つける行為を行った場合には、適正な手続きにより除名することがある。

「会員」については3年以上会費未納者については「会員の資格を失う」こととなる。現在、会費納入を3年以上確認できない方が複数名おられます。研究会では事務局会計担当の山崎委員が会費納入のお知らせ(通信及びA4文書毎年お届け)、事務局長の山本委員が通信108号において郵便物(通信、紀要等)の発送停止を告知してきた。これに則り、次号の通信・紀要から発送を停止することが承認された。

会員資格についても、該当する会員については、継続の意思確認を行うことに決定した。意思確認は期限を設けて行うものとする。期限内に回答が無い場合、会員継続の意思がないものとして、該当する会員の資格について喪失することについても承認された。

なお長期未納者の会員継続の条件は、未納分の年会費を期日まで(意思確認時に通知)に一括納入していただくことを条件とした。

(運営委員会代表：坂本辰朗、事務局長：山本尚史)

2023年度会計報告について

大学史研究会2023年度会計ならびに2024年度予算案につきまして、以下に概要をご報告します。

【収入】

2022年度会計からの繰越金は、1,214,839円でした。2023年度年会費につきましては137件分の納入をいただき、年会費・入会金の納入総額は791,000円でした。前年度の会費請求期間の遅れに伴い、2023年度は1名が2件分振り込んでいるケースもあります。新規会員は

6名です。年会費をお納め下さった会員各位におかれましては、この場を借りてお礼申し上げますとともに、今後も引き続き研究会の発展と円滑な運営のために、年会費納入に対するご理解ご協力をお願い申し上げます。なお学会誌「大学史研究」の売上金等は3,740円となっています。

【 支出 】

2023年度の紀要「大学史研究」の出版費用は589,685円です。編集委員会会議費・交通費は66,940円、消耗品や振込手数料は2,585円、「大学史研究通信」に係る通信費は240,533円、セミナー開催経費は35,000円になりました。セミナー開催経費の内訳は、講師謝金及びテープ起こし代です。次年度繰越金は、990,671円となっております。次年度への繰越金を除く総支出は1,018,923円、収支の差は、224,168円のマイナスとなりました。

「2023年度会計報告」に明記されているとおり、当該年度の会計は五島敦子会員ならびに田中智子会員に監査を依頼し、精細な監査の上会計の適正処理をご承認いただきました。なお、同一内容の会計報告の書類に対し、各監査の会員の方のサインを頂いておりますが、本通信上では紙面の都合からサイン部分のみを掲載しております。

○2024年度予算

大学史研究会では、次年度の予算案につきまして、事務局による基本案を総会に提示し、ここでの審議を経て、最終決定をいたしております。例年と同様、2024年度予算も上記の手順にしたがって予算案を決定しましたので、以下にご報告します。なお、セミナーの総会時に、いくつかの修正事項が生じているため、本通信に掲載されている予算案と、セミナー当日にお見せした予算案に若干の違いがありますことを予め申し上げます。

【 収入案 】

収入は、年会費と紀要売上金の2つになります。とりわけ、本研究会の運営経費は、年会費の納入に大きく依存しております。年会費につきましては、例年通りの600,000円を収入予定額として設定いたしました。また、会計担当者の切り替わりに伴い、会計業務の簡素化及び、会計担当者や事務局担当者の過年度分の立替金の補填分等を支出するため、特別会計から400,000円を繰り入れています。その内容については、下記の支出案についてご確認頂くようお願い致します。総収入額は2,000,701円、繰越金を除く総収入額は1,010,030円となります。

【 支出案 】

支出案は、2023年度セミナーが対面にて開催されたように、新型コロナウイルス感染症の影響もなくなりつつあることから、同感染症流行前の予算案を元に算出いたしました。

紀要『大学史研究』の関連費用は一般会計ではなく、新たに設けた「紀要「大学史研究」特別会計」にて処理をすることになりました。

一般会計について、編集委員会会議費・交通費及び事務局会議・交通費は100,000円としました。その他の諸経費もほぼ例年通りの額を計上しておりますが、通信印刷費については通信の電子化に伴い発送費用等の必要がなくなるため50,000円としています。通信印刷費はこれまでおよそ20万円程度支出をしており、紀要の出版に次ぐ支出額でした。過年度損益修正損は、会計担当者及び事務局員の過年度立替分の支払いのため、その負担分である342,141円としています。また、これまで事務局員の中で運用していた仮払い制度を廃止し、それに伴う清算のために64,751円を雑損失としています。なお、仮払い制度については、先の過年度損益修正損の要因にもなっていたことから廃止することといたしました。予備費は1,263,809円を計上しております。次年度繰越金と予備費をのぞく総支出予算案は736,892円を予定しており、273,138円の収入となります。一般会計としては徐々に支出超過を回避しておりますが、紀要「大学史研究」の特別会計化が主な理由となっているため、引き続き会員

の皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお、特別会計からは会計担当者の引継ぎ、会計制度の変更、これまでの清算等に要する支出として繰出し金を400,000円と、紀要「大学史研究」の費用として700,000円を計上しています。

以上、「2023年度会計報告」および「2024年度予算案」につきまして、ご質問ご提案等ございましたら、事務局までご連絡のほどよろしくようお願い申し上げます。

(会計担当：山崎慎一)

運営委員会からのお知らせ

私が、運営委員会の代表をお引き受けしてから、今回の総会で3回目となりました。対面でのセミナーへの復帰ということもあり、これまでにまして、準備にあれこれと手間と時間がかかり、何度か、思わぬ事態に陥りましたが、幸いに、大ごとに至ることなく、成功裏にセミナーを終えることができました。会員の皆様、さらには、山本尚史事務局長はじめ事務局の皆様にご改めて御礼を申し上げます。

さて、その思わぬ事態への対処についての事務局のメンバーの議論、あるいは、総会での会員の皆様の議論を聴いていますと、やはり時は刻々と経っているということを痛感いたしました。私は、1981年から大学史研究会に籍を置いておりますが、少なくとも20世紀が終わるまで、研究会の運営はどちらかと言えば既存の学会のとおりにはやらない、というのが一種の矜持であり——初期の研究会から参加されてこられた上山安敏先生のことばでは、大学史研究会は「浪人の集まり」であったとのことでした——、それで大きな問題は起こることなく、きわめて活発な活動を続けてこられたわけです。ただ、もはやそうはいっておられず、その心はかつての研究会のエートを継承しつつ、21世紀にふさわしい学術学会を創っていかなければならないと思われるのです。

一例を挙げますと、今回のセミナーにて発表の取り消しがあり——その事情は文字どおりやむをえないもので、私は同情を禁じえませんでした——、その扱いをめぐって、事務局内で議論をしました。その結論は少なくとも私にとっては、やや厳しいかという印象を受けました。ただ、再度考えますと、現時点での他学会での同様のケースの取り扱いを考えますと、むしろ、これが当然かと納得いたしました。

さて、私が申し上げたいことは、上記のように、思わぬ事態が出来て議論がおこなわれる場合はむしろありがたいのであって、そのような議論がおこなわれずに何となく通ってしまう、というのが実はもっとも危険な事態であるということです。このように申し上げると、そのようなことがおこらないようにと、大学史研究会の運営をつねにモニターをしているのが運営委員会の役割だろう、とお叱りを受けるかもしれません。ただ実際には、事務局員にせよ運営委員にせよ、専従ではないわけですので、やはり目が届か居ないところがあるわけです。結局のところ、学術研究について初心を忘れず、初歩的なことをきちんと守っていくという姿勢をどれだけ皆が共有できるか、ということだろうと私は思います。私を含めて、運営委員のメンバーが、任期あと1年になりましたが、会員の皆様のご協力を得て、次の運営委員会に渡していきたいと思っております。

(運営委員会代表：坂本辰朗)

次期運営委員選出のための推薦委員会立ち上げについて

昨年の総会でもご報告いたしましたように、2024年のセミナーをもちまして、現在運営委員の坂本辰朗、大川一毅、船勢肇、山崎慎一、山本珠美、山本尚史、吉野剛弘(以上、敬称略)の7名が任期を迎えます。そのため新たな運営委員会を構成するために、推薦委員会を立ち上げ、7名の運営委員の改選について議することとなります。

現在、運営委員会では推薦委員会を立ち上げる準備を進めております。推薦委員会は、現運営委員から3名、会員の皆さまから4名選出させていただきます。そのため自薦他薦によ

って4名の推薦委員候補者を公募致します。公募の要領は以下の通りです。

1. 立候補受付開始（この通信の発行日）
2. 立候補受付終了：2024年5月13日（月）17:00まで
3. 推薦委員会の構成のご報告：次号通信（2024年6月刊行予定）
4. 推薦名簿を会員に発送（2024年11月中旬；セミナー号外に掲載）
5. 総会にて投票（2024年11月下旬～12月中旬）

※立候補される方は、5月13日（月）17:00までに事務局メールアドレスにご連絡ください。候補者多数の場合は、運営委員会において、候補者の専門分野等のバランスに配慮して選出させていただきます。

立候補届の様式は定めませんので、メール本文にて立候補の意思をお示しください。

事務局メール： jimu-kyoku@daigakushi.jp

（事務局長：山本尚史）

会員新刊ニュース

会員の皆様が執筆された新刊（章を含む）をご紹介します。会員の皆様が刊行された書籍の情報を以下の記載欄にご紹介を希望される場合は、事務局のメール（jimu-kyoku@daigakushi.jp）宛にその旨をお知らせいただければ幸いです。

- ・ 出相泰裕編『学び直しとリカレント教育—大学開放の新しい展開—』ミネルヴァ書房、2023年12月。（五島敦子会員、山本珠美会員、菅原慶子会員、金明姫会員が執筆されています。）
- ・ 菅原慶子『「象牙の塔」と「生ける社会」の結びめ 明治期東大・早稲田の学術普及からみた大学理念』東京大学出版会、2024年2月。
- ・ 金明姫『韓国高等教育改革下の大学開放政策の展開 韓国名誉学生制度による大学の知の変容』東信堂、2023年11月。

（事務局・通信担当：蝶慎一）

退会者の報告

以下の方が退会されました。本会の活動にご協力を賜りまして、誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げます（順不同）。

大塚 豊 会員

羽田 積男 会員

（会員情報担当：船勢肇）

編集後記

このたび「大学史研究通信」第109号が完成致しました。「2023年度第46回大学史研究セミナー報告」にも書かれておりますが、4年ぶりの対面開催となりました「大学史研究セミナー」が2日間にわたり開催されました。12月上旬の真冬、また、年末のご多用の時期でもありましたが、多くの会員の皆様には、全国から中央大学茗荷谷キャンパスまでお越しいただき、ご参加をいただきました。この場をお借りして事務局より重ねまして御礼申し上げます。

朝晩は肌寒い日が続いておりますが、本号が会員の皆様のお手元に届く頃には、全国各地で桜の開花や満開のニュースが報告されている頃とお察し致します。一方で、年始から地震など自然災害の発生も後を絶ちません。こうした先が見えづらい現代社会では、人と人を繋ぐネットワークが重要だと言われることがあります。事務局では、大学史研究会が会員の皆様の多様なネットワークの場や機会などになりますように「大学史研究通信」の編集を含めて諸活動を進めて参ります。引き続き、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

(事務局・通信担当：蝶慎一)

「大学史研究通信」第109号の編集は、事務局・蝶 慎一（香川大学）が担当致しました。

連絡先：jimu-kyoku@daigakushi.jp

「大学史研究通信」第110号は、2024年6月発行予定です。

大学史研究会

〈運営委員会代表〉

坂本辰朗

〈事務局連絡先〉

事務局へのお問い合わせは、下記代表Eメールアドレスまでお願い致します

E-mail: jimu-kyoku@daigakushi.jp

運営委員（五十音順）

| | |
|----------------|---------------|
| 大川一毅（岩手大学） | 坂本辰朗（創価大学） |
| 船勢 肇（長崎女子短期大学） | 山崎慎一（桜美林大学） |
| 山本珠美（青山学院大学） | 山本尚史（筑紫女学園大学） |
| 吉野剛弘（埼玉学園大学） | |

事務局員（五十音順）

| | |
|------------|--------------|
| 蝶 慎一（香川大学） | 原 圭寛（昭和音楽大学） |
|------------|--------------|